

JICA国際協力中学生・高校生
エッセイコンテスト

2007

優秀作品集

— 北陸編 —

はじめに

独立行政法人国際協力機構（JICA）は、日本政府が行うODA（政府開発援助）の実施機関であり、「日本と開発途上国の人々をむすぶ架け橋として、互いの知識や経験を活かした協力をすすめ、平和で豊かな世界の実現をめざす」ことを使命として、主に人と人を通じた国際協力を行っています。開発途上国が抱える課題を解決するために、専門家を派遣したり、開発途上国の人々を研修員として日本に招いたり、青年海外協力隊やシニア海外ボランティアの派遣、あるいは、緊急援助隊の派遣などの事業を行っています。

さて、皆さんは「Think globally, act locally」という言葉をお聞きになったことがありでしょうか。自然環境が破壊されていく事態が地球規模で問題となってきた1960年代にこの言葉は生まれました。地球規模で進んでいく環境破壊のような問題は、「たったひとつの地球という見地から考え、そのうえで、個々の人の生活の場に根ざして解決のために行動する」という趣旨の言葉です。今、待ったなしの問題になっている「地球温暖化」は正に地球規模の問題ですが、これを食い止めるためには、毎日の私たち一人一人の行動を少し変えることにより、改善の方向に向かわせることが可能となることを私自身も強く自覚し、日々行動

したいと思っています。

エッセイコンテストは、次世代を担う全国の中学生・高校生を対象に、開発途上国の現状や日本との関係、国際社会の中で日本は何をなすべきか、そして、自分たちには何ができるのか、等を考えてもらうことを目的として実施しています。今回のコンテストでも海外渡航の経験を有する中学生や高校生からの作品、あるいは自分の通う学校に海外からやってきた仲間がいることを題材とした作品も多く見られました。今回の応募状況は、中学生の部が全国で32、390点（前年度は、28、123点、以下（）内は前年度実績）、北陸3県では、927点（646点）でした。高校生の部が全国で17、020点（15、962点）、北陸3県では、372点（379点）でした。

本冊子は、北陸3県から応募されたエッセイの中で、特に優秀であったものを中学生の部、高校生の部として収録しました。ご一読いただければ幸いです。

平成20年3月

独立行政法人

国際協力機構

北陸支部長 杉原敏雄

■入選

生活の貧しさ、心の貧しさ

矢野郁美

(射水市立新湊西部中学校)

8

虹色の絵を…

山本彩織

(氷見市立南部中学校)

11

ただそれだけで

本吉万希子

(金沢市立浅野川中学校)

14

感謝の気持ち

北野由希

(かほく市立宇ノ気中学校)

17

「心と心が通じ合えたら」

藤内秋桜

(坂井市立坂井中学校)

19

人は人にしか救えない

藤本佑衣

(鯖江市鯖江中学校)

22

■(社)青年海外協力協会会長賞

私がみんなのためにできること

小林彩乃

(富山市立山室中学校)

25

私にできる国際協力

青井志織

(かほく市立宇ノ気中学校)

27

■学校賞

- 加賀市立橋立中学校（石川県）
鯖江市鯖江中学校（福井県）
かほく市立宇ノ気中学校（石川県）
大野市開成中学校（福井県）
金沢市立港中学校（石川県）
越前市武生第六中学校（福井県）
富山市立山室中学校（富山県）
福井市清水中学校（福井県）

高校生エッセイコンテスト2007入賞作品

■審査員特別賞

延長線上に生きる私達

後藤 宏 美
——
32

（石川県立金沢桜丘高等学校）

■入選

タイムマシンと平和

村 澤 美 希
——
36

（富山県立南砺総合高等学校井波高等学校）

真の世界平和は、それぞれの安心から
夢の実現を目指して

高 瀬 直 己
——
40

（富山県立南砺総合高等学校井波高等学校）

世界みんなが幸せになるために

中 川 紗 世
——
44

（石川県立金沢桜丘高等学校）

国際協力機構

辻 美由紀

48

ボーダーレスな社会のために

小林 瑞季

52

■(社)青年海外協力協会会長賞

世界の子どもたちに私たちができること

能波 真穂

55

(石川県立金沢桜丘高等学校)

■学校賞

富山県立伏木高等学校 (富山県)

高岡第一高等学校 (富山県)

福井県立武生東高等学校 (福井県)

開発教育・国際理解教育支援事業のご案内

■JICA 国際協力出前講座

■教師海外研修

■JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト

■JICA 訪問他 (国際協力をもっと知りたい方へ)

60

61

62

63

中学生の部

〈応募総数〉

北陸3県 927作品（46校）

（富山県254作品、石川県319作品、福井県354作品）

全 国 32,390作品

生活の貧しさ、心の貧しさ

射水市立新湊西部中学校 二年 矢野 郁美

私が小学生の頃、青年海外協力隊の方が学校に来られたことがある。その方はニジエールに行かれ、その子供たちに勉強を教えたり、けがの手当てをしておられたという。

ニジエールという国を知っているだろうか。アフリカ大陸の北の方にある、あまり知られていない国である。国土の三分の二以上が砂漠であり、最貧国の一つである。

その方の用意された現地での写真を見て、驚いた。水道がないから、井戸まで

汲んでこなければならぬ。ガスもない、学校もない。私たちの生活では考えられないことが、世界にあるのだ、ということをも改めて実感した。そして、支援物資や支援活動の必要性をひしひしと感じた。

しかし、それらの写真のスライドショーを見ていると、ふと気が付いた。写真に写っている人たちは、子供も含め、とても大変そうである。でも、カメラに見せた表情は、どれも笑顔である。青年海外協力隊の方に話しかけられているとき、子供たちがみんな数字や文字の勉強をしているとき、とてもうれしそうに、楽しそうに、まるで太陽のように笑っている。

決して豊かな環境ではない、とても貧しい環境にいる。それなのになぜ、あんなにもうれしそうに、楽しそうに、幸せそうに笑っているのだろうか。

それは、人との交流が多いからではないだろうか。発展途上国で生活していくのは、とても困難であり、大変である。だからこそ、大変なところをお互いに助け合ったりという機会がたくさん生まれる。そして、人の温もりを直に感じ、心が温かく、豊かになる。

それに比べ、日本はどうだろうか。世界の中でも経済大国であり、先進国である。そのためなのか、「自分一人で」、「自分の家だけで」と言って、自分の殻に

引き込もる人もいる。他人の弱さに付け込み、自分の弱さを隠そうとするいじめもある。

発展途上国は、確かに生活は貧しいし、辛いこともたくさんある。けれど、豊かな心という支えがあるから、乗り越えていける。たくさんのおよびがある。

しかし、日本は生活は豊かだけれど、貧しい心を持っている人がたくさんいる。表面的な部分だけでなく、内面をもよく見直してみると、まだまだ先進国とは言えない「精神発展途上国」だろう。

世界各地の発展途上国への支援は、もちろん大切である。しかし、それと同時に、自分の国の「精神的な発展途上」という問題を何とかしなければならぬ。

発展途上国から学んだ、人との交流を大切にすること。この国際社会の中で、国を更に発展させることにつなげていくのではないだろうか。

虹色の絵を…

氷見市立南部中学校 三年 山本 彩織

世界の子供達は、私達のように楽しく毎日を過ごしているのでしょうか。知っていますか今の世界の子供達を。

私は、以前から海外へ行き、人の助けになるためにがんばるJICAの活動にとても興味がありました。そして、今年の修学旅行でJICA広尾を訪れました。海外へ実際に派遣された方の話を聞き、文化の違いなど日本との違う世界の話も聞けてとても楽しかったです。しかし、日本と違う所は文化などだけではありませんでした。それは子供達の現状です。現在、世界には、学校に行けない子供が

七千七百万人もいます。学校に行けない理由は様々です。学校が近くにない、通うお金がない、働かなくてはいけない、紛争にまきこまれたなどこれを聞いただけでも、今の私のように学校に行き、何の心配もなく友達と遊んでいることができなと思うと、同じ子供なのにと悲しくなりました。そして、このような理由で学校へ行けない子供は、社会に必要な読み書きができなくてだまされやすく、ずっと貧しさから抜け出せなくなりです。私はこんなかなしい寂しい世界でいいんだらうか。みんなどんな思いでいるんだらうか。これが、あたり前の様に考えられているなら悲しすぎると思いました。

ある時先生が、

「絵は一番自分の心が現われやすい。世界でつらい思いをしている子供達は、絵をかく時黒しか使わなかったり、途中で絵を消そうとぬりつぶして壊してしま

う。」
と言いました。真っ黒、暗くて寂しくて私はあまり使いたくない色。いつもこんな暗い色で染まる心はどれだけ傷ついているのだらう。私もなにかしてあげたい。そんな気持ちがあふれてきました。私は、このJICAで学んだことを新聞にしてクラスに掲示しました。少しでもみんなにこの活動を知ってもらえるようにと

思ったからです。私一人にできることは少ないけど、だれかに伝えることでたくさんの方がこの現実を知り、それがいつか大きな輪となってみんなで助け合って生きる世界になってほしいと願います。

先日、テレビで数年前家族でネパールへ行き、そこで子供達の生活の現状を見て、友人達に話すとそこで支援の輪が広がり、次の年から、毎年子供達が必要なものを、えんぴつ何本、洋服何枚というふうに学校へ届けに行っているのを見ました。こんなふうに広がっていったら最高です。

そして、世界の子供達が、届けられた色えんぴつを使って、虹色の絵を描いてくれる日が来ると信じています。

ただそれだけで

金沢市立浅野川中学校 三年 本吉 万希子

広い世界。たくさんの人が暮らす中で、私もその中の一人として生きている。しかし、世界中の人々に出会った事はない。私が住んでいる日本の反対側で何が起こっていて、どんな人が住んでいるのかも知らない。もしかすると、とても富かな国でみんな幸せに暮らしているのかもしれない。その逆で、とても貧しく、同じ世代の子供が学校にも行けずに働いているのかもしれない。けれど私にはどうすることもできない。ずっとそう思っていた。

毎日、当たり前のように学校へ行く事ができて、家へ帰ればおいしいご飯を作っ

てお母さんや家族が待つてくれている。汗をかけば、十分すぎるほどの水で体を洗ったり、湯船につかって疲れを癒すこともできる。幸せな生活が当たり前になり、もっと幸せな生活を求めている。貧しい国の事を考えた時、本当はささいなことでもいいから何かできたのかもしれない。でも私は、こうした幸せな生活から、うしろめたさを感じ、何かしようとするのではなく、できないと決めつけて、目をそらしてしまった。

本に載っていた、たくさんの写真が私の目にとまった。貧しい国の子供達だった。必死に働いていて、服はもうぼろぼろだった。そんな多くの写真の中でも、一枚の写真が私を驚かせた。とても小さな男の子が飢えに苦しみ、倒れていた。そしてその子を狙って離れようとしな一匹の鳥がすぐそばで見つめていた。気が持ちがすぐくおもくなくなった。どうにかしてあげたい。そう思えた。自分がその男の子だったら？助けてほしい。ただそう願う。ささいなことでもいいから何か自分にもできることがあるのかもしれないと感じた。自分にしかできないことだってあるのかもしれない。

ただ、生まれた場所が違っただけで、こんなにも苦しい思いをしている人がたくさんいる。それでもみんな一生懸命に生きている。そんな人達を見て、「自分

には何もできないことがない。」そんな考えを持つてはいけない。私達には目や口、耳、鼻だつてある。手や足、体などのたくさんの素晴らしいものを持つてゐる。何もできないと思うなら、ただ口を使つてたくさんの人々を励ましてあげればいい。ただ手を使つて抱きしめるだけでもいい。ただ世界中の人々、一人一人が誰かのことを思い、命を無駄にせず、一生懸命に生きていくだけでもきつと何かが変わり、多くの人々が救われる。私はそう信じたい。それだけでも世界中の人々が幸せになるための第一歩となると思うから。

感謝の気持ち

かほく市立宇ノ氣中学校 三年 北野 由希

私は日本という豊かな国に生まれました。石川県はそんな大都市ではないし、宇ノ氣町は田舎の方だと思います。家のまわりにでっかいビルがあるわけでもなかったけど、充分私は不自由なく生きてこれました。欲しい物は買ってもらえたり、おいしいご飯も食べれます。それが普通の事だと思っていました。

国際協力の勉強をして、世界は私が思っている以上に貧富の差があることを知りました。今までにも学校へ行けない子供達がいる事などを聞いたことはあっても、特に気にも留めずご飯を平気で残したりしていました。でも今回、青年海外

協力隊の方達の話聞き、こんなに多くの人がちゃんと生活出来ていないんだと知りとても驚きました。私がお飯を残している間にも世界ではたくさんの方が亡くなり、それよりもっと大勢の人が、生きる事に精一杯でいるんだと思うと、こんなんじゃないかと思えました。

私は何が出来るんだろうと思いました。例えば募金？ご飯を残さない？いろいろ考えてみても本当にそんなんでいいのかなあ、と思いました。今でもイマイチ分かりませんが、何もしていないよりずっといいだろうな、という事は分かりました。何より、何かしてあげようという気持ちが大切だと思います。皆が少しずつ動き出して、いつか世界が変わったらすごいなあと思いました。

毎日当たり前のように生きていて、感謝するということを忘れていたような気がします。感謝することはすごく大切な事だと思いますが、ほとんどの人がその事を忘れていると思います。物をくれてありがとう、何かしてくれてありがとう、そんな事も大切ですが、それ以前に豊かな日本にありがとう、そして昔日本に援助してくれた世界の国にありがとう、が必要な気がします。なかなかそんな事を考える人は少ないと思うので、国際理解をもっと多くの人に広めて、意識する人が一人でも増えればいいなと思います。

「心と心が通じ合えたら」

坂井市立坂井中学校 一年 藤内 秋桜

「貧困で苦しんでいる世界の子どもたちのために、私に何ができるだろうと思っても、なかなかよい考えが浮かばない。そんな中で、私はいくつかのことを行ってきた。

私が生まれた時、いただいたお祝いで、両親はボランティア貯金をしてくれた。そして、入学祝い、お年玉など少しずつ貯金をしてきた。利子の一部が、途上国で役立てられている。アフガニスタンの難民には、冬場の厳しい寒さを乗りこえるための衣料品を送った。スマトラ沖の大津波の時には、知人がスリランカで被

災して亡くなったので、せめて何か役に立ちたいと思って、子どもたちに文房具や衣料品を送った。小学校を卒業した時には、思い出のランドセルをアフガニスタンの子どもたちに送る活動をしているNGOに寄付した。

日本という国にいて、できることといったら、これくらいだった。私は、何かもう少し違った角度からできることがあるのではないかと考えてきた。物を送るだけでは、さみしい気がした。もっともつと心が通じ合えるような「何か」があるのでは。

そして、ある日「チャイルド・スポンサーシップ」のことを知った。これは、様々な事情で親がいない、極度の貧困で学校へ行くことはもちろん、十分な栄養をとることもできない子どもたちのスポンサーになり、経済的な支援をしながら、その子の成長を見守っていくしくみだ。

一人の子を支援していくので、手紙や誕生日カードのやりとりができ、心が通い合えるような気がした。そして、その子がどんなことで困っているのか、どのような支援が必要なのかが直接わかれば、もっと何かできることを考えられるかもしれない。

しかし、お金を送るということは、とても大きな責任が必要だと思った。どこ

から出すのか。ずっと送り続けることができるのか。その子にだけ送ることが、周りで苦しんでいる子にとって不平等になるのではないか。途中で送ることができなくなったら、その子の将来をつぶしてしまうのではないか、など考えると、責任がずつしりとのしかかってくる。

それでも、もしも、その子が学校へ行くことができ、やがて社会にこうけんし、貧困を解決し、その子の住む村や都市の環境を変えていく力になるかもしれないと考えると、私は応援したいと思う。まず、お金をどのように貯めることができるか家族とじっくりと相談しようと思う。

私は一人っ子なので、妹が欲しいと思っていた。もしも、この活動に参加することで遠い国に妹ができたなら、私はとてもうれしい。

私は、遠い国の妹といっしょに成長し、将来いつか会って、抱き合える日を夢見ている。そして、物やお金ではない、心と心が通じ合える交流をしていけたらと思う。

人は人にしか救えない

鯖江市鯖江中学校 三年 藤本 佑衣

世界のみんなが幸せになるために私ができることってなんだろう。

かぎりなく続く青い海。かぎりなく続く青い空。真上にある太陽。あたりまえに広がる世界。あたりまえの毎日。もしかしたら、このあたりまえの世界は見る人によって違うのかもしれない。

この広い広い地球というホシには、いったいどんな人たちが生きているのだろう。

こんなちっぽけな私に、このホシに生きる世界中の人たちのために、何かでき

ることは、役に立てることはあるのだろうか。

私はまず、世界ではどんな問題がおこっているのか調べてみました。調べていくうちに、私は改めて自分の住んでいる日本という国の平和さ、裕福さを強く感じました。

世界のある国では、私と同じ歳の子が武器を持ち、爆弾が飛びかう中で戦っています。またある国では、地雷に苦しんでいる人々も大勢います。人間が作り出したものによって、人間が苦しんでいるのです。

また、世界では二十か国以上、八億人を超える人々が十分な食べ物を得られず、飢餓に苦しんでいるそうです。

そのことを知り、私は学校の給食の時間をおもいかべました。私は好き嫌が多く、今までにたくさんものを何も考えず、ゴミ袋に捨てていました。クラス全体、学校全体でみると、毎日多くの食べ物が無駄に捨てられていたと思います。

世界人口六十二億人のうち、約八億三千万人の人々が栄養不足になっています。しかし、世界全体では、すべての人々が十分に栄養をとれるだけの食糧が作られ

ているといわれています。

世界では、多くの人々が飢えとたたかっているというのに、私たちはこんな生活が続けたままでもいいのでしょうか。平気で食べ物を捨ててしまえる、そんな生活のままでもいいのでしょうか。

私たちが普通だと思っ生活している「今」という時間にも、さまざまな問題を抱え苦しんでいる人々が、世界には大勢います。

私たちには、たった五十円で栄養失調の子どもにあたえる栄養食四食を買うことができません。それは、私たちがたった一本、ジュースを我慢することで、何十人という子どもの命を救うことができるということです。

「助けになりたい」「役に立ちたい」という思いがあるなら、私たちが世界中の人々のためにできることはたくさんあるはずですよ。

私たちに必要なことは、同じ地球というホシでおきている現実をみつめ、今の私たちに何ができるのか、一人一人が考え行動することだと思っています。

「二人はみんなのために、みんなは一人のために…」

(社)青年海外協力協会会長賞

私がいみんなのためにできること

富山市立山室中学校 一年 小林 彩乃

「思いやり」

私は、この言葉が世界のみんなが幸せになるキーワードだと思っています。

まず、幸せって何かと考えてみましょう。お金でしょうか、自分のほしいと思つたものが手に入った時でしょうか。確かに、それもあると思います。でも、幸せというのは、その本人が幸せと思つた時に初めて幸せというのだと思います。だから、たとえ、お金がなくても人に優しくしてもらつたり、友達ができたときなど、私は幸せだなと思います。

前にこんなことがありました。この前、家族旅行で県外に行きました。その時、車いすに乗った女の人が段差に気付かず、そのまま進んでいこうとしていました。すると、近くにいた男の人がそれに気付いて、「そこ段差ですよ。気を付けてください。」と言って、少し、車いすを押しあげていました。女の人は深く頭下げて、「ありがとうございます」と言っていました。男の人も優しい顔をしていました。見ていた私も、なんだか優しい気持ちになりました。思いやることは自分自身の幸せにもなるのだと思います。また、最近、バスで、おじいさんがいて、ゆずろうかなと思っているうちにおじいさんはバス停で降りていってしまい、とても後かいました。思いやるというチャンスをのがすと後で後かいてしまうと思います。だから、私はどんな状況でも思いやりという言葉を忘れず、みんなに接してあげたいと思います。私が今、みんなを幸せにできるのはこんな小さな事だけでしょうか、世界のみんなが幸せになれたらいいなと思いました。

私にできる国際協力

かほく市立宇ノ氣中学校 三年 青井 志織

今、世界ではたくさんの人々が困っています。私たちのように恵まれた生活をしている人々ばかりではありません。飢えに苦しみ、生活に困り、学校にいけない人がたくさんいます。そのことをJICAの方に話を聞き、知ることができました。

聞いた話の中で私は、学校に行けない子どもの多さに驚きました。世界中で多くの子どもが学校に行けていませんでした。なぜなら、その子どもたちは自分や家族のために遠い井戸まで歩き水をくむのに一日中費やし、また大人と同じよう

な仕事をたくさんしなければならぬからです。初め、私と同年のような子たちまで働かないといけないのはかわいそうで、大変だろうと思っていました。学校に行けないとか、勉強ができないということを特別かわいそうだと感じませんでした。内心、勉強できないくらい……と思っていました。しかし、その現状を知るにつれて私たちが毎日勉強できることの幸せを感じ、毎日の学校生活ががんばって後悔しないようにしたいと思いました。

しかし私たちは何をしなければならぬのでしょうか。JICAの方の話から、そのことも分かるようになってきました。まずは募金活動や物を寄付することです。これは簡単にできる国際協力の一つです。この少しの協力が世界の何人かの命を救うことができ、少しずつでもたくさんの人が協力することで、何千万もの命だけではなく、世界中の命を救うことができると思います。また他に、もっとも簡単に今すぐにもできる国際協力があります。それは、発展途上国など世界中の現状を知り、みんなに伝えていくことです。苦しい生活をしていることとはだれもが知っていると思います。しかし、それをもっと知るようにすることで、その内面のもっと厳しい生活まで分かるようになり、国際協力の大切さも分かってくると思います。そこで私たちは、日本文化でもある琴や歌のチャリティ

コンサートをし、国際協力を呼びかけました。私たちの活動が少しでもみんなの心に響き、国際協力に参加しようと思うきっかけになってくれればうれしいです。私は、もっとたくさんの人に呼びかけ、自分自身も国際協力していきたいです。私たちにできることはたくさんあります。まずは世界の国々を助けたい、その気持ち大切です。



高校生の部

〈応募総数〉

北陸3県 372作品（11校）

（富山県263作品、石川県38作品、福井県71作品）

全 国 17,020作品

延長線上に生きる私達

石川県立金沢桜丘高等学校 一年 後藤 宏美

「私は人間の形をしてはいない。右手も両足も、左耳も持っていない。」とア
リが告げたのは、私達が知り合ってから一年経った時だった。その時初めて、私
は枯葉剤という化学兵器について知り、その恐ろしさを実感することができた。

枯葉剤とは、ベトナム戦争の戦時中に撒かれた化学兵器である。アメリカに敵
対する南ベトナム解放民族戦を殲滅するために撒かれた枯葉剤は、北緯十七度以
南にいた人々に降りかかり、癌や流産、新生児の先天性異常が発生した。もうす
ぐ四十年経つ今でも後遺症で苦しむ人々がいる。アリが説明してくれた枯葉剤の

恐ろしさは、何も知らなかった私にとって衝撃であった。今までテレビの上でしか知る事のなかった情報が突然現実味を帯びて目の前に現れるとは思わなかったのだ。

私がありと出会ったのは、インターネットでの学生交流コミュニティの中である。世界中の学生が知りあえるその場所は、意見交換がとて活発に行われており、意見交換をする中で色々な国の人と仲良くなる事ができる。誕生日が長崎の原爆投下日であることをきっかけに、私は原子爆弾投下に対しての意見が書かれている掲示板を見ていた。中では色々な国の人が原爆症について書き込んでおり、国ごとの観点の違いが明白に表れていた。その中の文章で特に優れていたのは、後にメール友達となるベトナム在中のアリという少女であった。私より一つ年下の彼女は、日本寄りの立場でとても読みやすく、誰よりも熱心に後遺症の恐ろしさについて書いていた。

今思えば、彼女は身をもって苦しさを知っていたから熱心になって書いていたのだ。原爆症と枯葉剤による後遺症は、次世代にまで影響がおよぶ点で似ている。彼女であったからこそ、「この問題の認知度を上げなくてはならない」という文に重みがあったのだ。

メールを交わしていくうちに、彼女は自分の事について教えてくれるようになった。枯葉剤を浴びたのは彼女の祖母で、後に生まれた彼女の母には後遺症が出ていないという事。彼女の祖母は癌で亡くなったという事。兄二人は後遺症は出ていないが、先日生まれた弟には頭蓋骨が無かったという事。数パーセントの確率で遺伝する後遺症が、彼女の家族には高い確率で遺伝している事に、アリはとても不安になっていっているらしい。「もし私に赤ちゃんができれば、その子も奇型児になってしまいかもしれない。」と、彼女のメールには淡々と書いてあった。

先日、アリから一行のメールが送られてきた。「日本の方は、私達のような人の存在を知っているのだろうか」という内容だった。

ありのままを伝えてもいいのだろうかと私は悩んだ。存在こそは知っているが、その存在はテレビ画面の中でしか起っていないとしか捉えておらず、同じ人間が被害にあっているのだとは思っていない事を。私もアリと出会うまでは、身近に在る問題だとは思っていなかった。そのような人間が多い事を告げたら、アリは傷つくのではないかとも考えたが、ここで嘘をつく事はアリへの裏切りになってしまう。最終的に私が送った内容は、「大勢の人が現実社会に起こっている事だとは思っていない」という文。しばらくしてアリから返ってきたのは、「私達

の存在に対しての理解が必要。そして私達は憐れみよりも、私達の存在の証明のための行動が欲しい」という事。後遺症の存在を、アメリカは今も認めてはいないのだ。

私はアリと出会って、自分が過去とつながった所に生きている事を初めて実感した。情報としてしか知らなかった問題が、急に色付いて見える様にもなった。私はこれから、情報に対し受け身ではなく行動を取れる様になろうと思う。その行動の一つとして、この文章を書く事ができて本当に良かった。

タイムマシンと平和

富山県立南砺総合高等学校井波高等学校 二年 村澤 美希

「タイムマシンを使って、一九四五年八月十五日に行きたい。」

タイムマシンは、人に乗せて過去や未来の世界へ自由に旅行できるといふ空想上の機械だ。私は日本人として過去に戻り、当時の人と終戦を告げるラジオを聴きたい。

今日八月十五日、六十二回目の終戦記念日を迎えた。私は、その終戦記念日にこの作文を書いている。いつもと変わらない夏の暑い日、外は絵の具を塗ったような青空で、蝉がミンミン鳴いている。子どもの笑い声も聞こえて気持ちよいも

のだ。終戦を告げるラジオを、当時の人はどんな気持ちで聴いたのだろうか。私は仏壇に向かって黙祷した。

「戦争終わったね。」

思わず目頭が熱くなった。

中学三年生の修学旅行で、京都にある国際平和ミュージアムに行った。館内は薄暗く、軍服や赤紙など戦争に関するものが展示されていた。そのなかでも、飢えで生き絶えた人の写真は残酷で強く印象に残った。

三年前、祖父が亡くなった時のことだ。通夜の後に自然と戦争の話が始まった。戦争を体験していない私は、黙って聞いているだけだった。

「食べ物もなく、空襲で家を失ってしまったね。本当につらかった。道には死体が横たわっていて、そりゃ無惨な光景だったよ。」

親戚のおじいさんは、少し震えた声で聞かせてくれた。

戦争体験者は、その大半が高齢者になっている。こうして戦争体験を言い伝える事ができるのも、あと少しだけではないか。私達は戦争の恐怖を忘れてはいけない。

戦争と聞けば、原爆を思い出す人も少なくないだろう。キノコ雲の写真は、教

科書で何度か見た事がある。日本はこの地球上で唯一の被爆国である。しかも広島、長崎と二度原爆が投下された。写真や映像で見る光景は、まるで悪夢だ。ところがその悪夢を「しようがない。」と発言した人がいる。私は、否定も肯定もできない。なぜなら過去の歴史を変えることは不可能なのだから。しかし、日本は世界中の人々に原爆の恐ろしさを伝えていかなければいけない。伝えていくのが義務だ。

『平和』を辞典で調べてみると、「戦争や紛争がなく、世の中が穏やかな状態にあること。」という意味だった。

私は小学生の時、アルミ缶集めのボランティアをした事がある。集めたアルミ缶をお金に換えてもらい、アフリカに井戸を掘る資金にするのだ。ビニール袋にたくさんアルミ缶を入れて学校にもっていったことを覚えている。しばらくしてから送られてきた写真には、掘った井戸と、アフリカの人たちの笑顔が写っていた。私は、とても嬉しかった。

今の日本は平和で豊かな国だ。蛇口をひねれば水も出るし、有り余る程の食糧もある。私達は、この豊かな環境に甘んじてはならない。世界中には紛争や飢餓に苦しむ人々がいる現実を忘れてはいけない。

最後に、戦没者の方々のご冥福を心からお祈りし、一言伝えたい。
「タイムマシンを使って、二〇〇七年八月十五日に来て下さい。何も考えずに
昼寝ができる平和な時代になりました。」



真の世界平和は、それぞれの安心から

〈夢の実現を目指して〉

富山県立南砺総合高等学校 井波高等学校 三年 高瀬 直己

国連は、「世界平和と安全の維持」「紛争や戦闘を停止させること」「戦争や災害から生まれた難民の保護とケアを行うこと」「病気の予防や自然環境の改善」など、多様な分野で、その力を発揮し、今日まで活動してきた。

もし私が国連職員になったら、一番に考える事はもちろん、世界平和である。真の世界平和とは、その国に見合った、その国の人々に合った、安心した生活を送ることができることだと、私自身は考えている。

日本が第二次世界大戦で敗戦してから六十二年の歳月が経つ。私の祖母も、戦争という激動の時代を生き抜いた一人である。祖母は当時、十二歳で、毎日、畑仕事をしていたそうだ。学校に行っても勉強する時間を削り、竹槍を持って戦闘訓練をしたり、山へ出掛け畑を耕したりなどと、心も体も休まる時間が全くなかったと聞いている。

日本が六十二年間で、経済大国といわれるまでに復興できたのは、我が国だけの力だけではない。敗戦当時にユニセフから受けた数々の援助が、現在の日本の発展に大きな力となったと言っても過言ではない。一九四九年から一九六四年までの十五年間、学校給食、毛布や衣類の原料、医薬品など、当時の金額で六十五億円もの援助を受けていた。これは、現在の日本円に直せば膨大な金額になる。

豊かな生活をしている私たちには想像も出来ないが、六十二年前の日本では、どんなに努力しても、その日の食べるもの、着るものにも困り果てていた。その時ユニセフからの数々の援助のおかげで、少しずつではあるが、我が国の人々は安心を取り戻していった。

日本は、ユニセフの援助と持ち前の勤勉さから経済大国にまで登り詰め、安心

も、より高いものとなっている。しかし、日本が安心だから、世界中どこでも安心という訳ではない。少なくとも、この地球上には、私たち日本人が感じているような安心を、感じることの出来ない人々が大勢いる。それらの多くは貧富の差が激しい国の人々や発展途上国の人々をはじめ、戦争や災害で苦しんでいる人々が、大半を占めている。私たちは安心と一言で言うが、それは時代や場所、人種によっても異なり、安心に対するニーズは、私たちの想像を絶するほど大きく異なるのである。

私は一昨年、全国の国際理解の弁論大会に富山県代表として出場した。そこでは日韓問題を解決したいと訴える人、日本の長崎に原爆が投下されたことを忘れないでと訴える人など、平和だと自他共に認めている日本で、様々な不安を抱えている人たちと出会った。

彼らを安心させるためには、彼らのニーズをしっかりと理解し、対応することだ。しかも海外への資金援助だけではなく、今、その国には何が必要なのかを見極めて、世界平和を目指していきたいと強く考えている。

私は三年間、福祉科で学び、介護の基礎知識や制度や法律、施設実収やホームヘルパーの同行訪問などもやった。今後は、福祉関係の大学に進み、社会福祉士

の資格を取得したいと考えている。将来は国連職員として、自分の専門を生かし福祉社会の現場でいろいろなニーズに対応できる職員として働きたいという大きな夢を抱いている。夢の実現に向け、九月十四日には、岩手県立大学の社会福祉学科のAO入試にチャレンジする。三年間学んだことを出し切り目標が達成できるまで頑張り抜く決意を新たにしている。

そして、国連職員として、地球上に住んでいる人々が安心して生活出来るように真の世界平和を目指したいという大きな夢に向かって今、その第一歩を踏み出すようにしている。

世界のみんが幸せになるために

石川県立金沢桜丘高等学校 一年 中川 紗世

私には、暖かく受け入れてくれる家族がいて、お互いを分かり合える友だちがいて、いろいろなことを教えてくれる先生がいます。私は、そんな人たちに支えられながら、誰とも変わらない暮らしをしています。朝、布団から目覚め、食事をして、学校に通い勉強や部活動をし、家に帰ってその日を終えます。このような生活を当たり前に行っている私たちですが、私たちにとっての当たり前の生活が送れない人々が世界中にいるのが現状です。

今、世界のどこかでは紛争がくりひろげられ、飢餓で苦しむ人々が後を絶ちま

せん。食料も碌にない、学校にも通えないなどといった、私たちには考えられない程の生活を送っている人々が、明日に来るか分からない死と隣り合わせで生きています。

そもそも私たち先進国と発展途上国との貧富の差はどこから生じるのでしょうか。原因は多々あると考えられますが、私はテレビ番組の特集でいくつかの原因を知りました。一つは、人間の体内で最も必要なエネルギーとなる穀物が全世界に百パーセントあるとすると、私たちが摂取している量はほんのわずかで、ほとんどが家畜の餌として使用しているそうです。理由は言うまでもなく、美味しい肉を作り上げるためです。もう一つは、発展途上国の労働者の多くは、先進国で安い値段で売られている物の原料となるものを栽培しているということです。一つ例を挙げると、煙草の葉を長時間にわたって栽培し、先進国で製品となつて安く売られています。安く売られているのだから労働者の賃金はごくわずかです。このように、アフリカの人々はヨーロッパのために、南米の人々は北米のために、そしてアジアの人々は日本のために、安い賃金で長時間働いているのです。

私はこの事実を知るまで、私たちとの間にこんなに深い関わりがあるとは想像もつきませんでした。これらの原因から言えることは、やはり私たちは贅沢をし

ているということだと思います。日々大量に出るごみ、飽食……今となってはどうにもならない大きな社会問題となっています。私は、その問題についての私たちの対策意識をもっと高めなければいけないと思います。「仕方がない」という意識を持つていては対策の進歩はないでしょう。

かのマザー・テレサは、初めて日本を訪れたときに、物質的に一番飢えているのはアフリカだけれど、精神的に一番飢えているのは日本だと言いました。貧しい人々が大切にされるものでも、日本人は使わなくなったらすぐに捨ててしまう、と。それはものに限らず人に対してもそうなのかもしれません。最近のニュースでは、気に入らないことがあるからと言って、周りの人を粗末にしてしまった出来事が増えてきているように感じられます。今の日本は、他国と比べて人やものの価値観のとらえかたが少しばかり衰えているのではないかと思えます。

私は以前に駅で暮らしているホームレスを見かけたことがあります。その人たちは、家族に見離され、自分が必要とされていないと感じている人が多いのではないのでしょうか。心の貧しさとは、自分はいてもいなくてもいい、みんなから捨てられていると感じること、そしてそれらの人に無関心でいることだとマザー・テレサは訴えかけたかったのではないのでしょうか。

マザー・テレサは、私たちにできることはまず一番身近な人、家族に愛と優しさを注いでと言いました。それはとても小さなことですが、世界みんなが幸せになるためにはそこから始まるのではないでしょうか。家族から始まり、友だち、見ず知らずの人……と愛と優しさは広がっていくのだと思います。そして世界中に広がれば、戦争はなくなり、物質的にも精神的にも豊かな世界になるのではないかと私は考えます。

国際協力機構

福井県立武生東高等学校 一年 辻 美由紀

私たちはジャイカについてどのくらい知っているのでしょうか。

ジャイカの存在を初めて知ったのは、中学三年生のときの社会の授業のときでした。ジャイカ、日本語で国際協力機構といい、一九五四年から発展途上国に対する技術協力を開始しました。

当時の私はただテストの点数をとるためにジャイカ(国際協力機構)の名を淡々と覚えてきました。

そして私は武生東高校国際科に進学し、世界の情勢に目を向ける機会が増えて

きました。さらに、私の父は県庁に勤務にしており、五年前（平成十四年）にジャイカの専門家技術派遣に、およそ二カ月間の研修を修了し登録されました。これを知ったのはつい最近です。

そのようなことがあり、私はジャイカに対する関心が高まりました。父に送られてくるジャイカ機関誌も毎月読むようになり、ジャイカの活動内容などを学びました。

ジャイカという機関を知っていくにつれて、私の中で、ある疑問が生まれました。

——衛生環境が悪く、生活していく上で必要なものがない人々の暮らしにいつ終止符が打たれるのだろうか。——

ジャイカの機関誌に、電気や水道など私たちがあって当たり前だと思っていた生活用品や技術を手に入れて、すぐ嬉しそうに笑っている発展途上国の人たちの写真を見たことがあります。同じ地球に住む人間でありながら国によって貧富の差が激しいのが現実です。今の日本で、餓死や戦争に巻き込まれて死亡するなどということは考えられません。ですが、他国のイラクやエチオピア、カンボジアなどの国々では決して珍しい光景ではないのです。

世界でも有数の平和国である日本に生まれた私たちは、発展途上の国々の技術による発展、衛生環境を整え、一人でも人間らしい死を迎えさせる義務があると思います。人間が飢餓で死ぬなどあつてはならぬことです。ましてや、技術が無く不衛生な生活を送り続け、病気になる人が出てくるのは、私たち先進国の人間の責任だと思います。

ジャイカの活動は素晴らしいと思います。自分が好きな、もしくは得意とする分野を現地の人たちに教え共により良い環境を造っていくのです。自分の行いで何人の笑顔が生まれるか分かりません。何人の命が救われるか分かりません。国境という壁を乗り越え現地の人々と共に学び、共に笑いながら人々に感動を与えられる。これほど嬉しいことはないのでしょうか。

日本やアメリカ、ヨーロッパ諸国などの国々は自国の技術をどんどん発展途上の国の人々に伝えることが大事だと思います。言葉や文化などの壁は高いですが、互いに分かり合いたいという気持ちがあればそんな壁はすぐに飛び越えられると私は信じています。

日本は最も援助金を出している国の一つだと知りました。私は、それを聞いてとても誇らしく感じました。しかしいたずらに建造物などを建てたりしてお金を

無駄遣いするより、発展途上国の技術開発援助金として遣うべきだと私は思うのです。

これからジャイカについてより多く学び、知り、将来何らかの専門の資格をとってジャイカの職員になりたいと思っています。その夢を実現すべく、世界の情勢に目を向け、相手を理解する力を養っていきたいと思います。そして最後に、自分が日本人であることに誇りを持って生きていきたいと思います。

ボーダーレスな社会のために

福井県立武生東高等学校 一年 小林 瑞季

「世界のみんなが幸せになるために、私たちができることは何か。」そのことを考えた時に、テーマが重い気がしてあまり良い考えが思いつきませんでした。だから、もっと自分にとって身近なところから考えてみようと思いました。すると、前に体験した一つの出来事を思い出しました。

私が家族で近くのショッピングセンターへ買い物に行った時のことです。私が買う物を選んでみると、レジでお金を払っていた人が小銭を落としてしまいました。私の近くにも小銭が転がってきたので、拾ってその人に渡しました。でも、

私以外の誰も小銭を拾おうとしていませんでした。その小銭を落としたのは外国人だったのです。

周りの人たちが、外国人だから小銭を拾わなかったのかは分かりませんが、気付いているのに見て見ぬふりをしているようで少し悲しい気持ちになりました。もし、小銭を落としたのが日本人だったなら誰か拾っていたのかもしれないなとも思いました。もしそうならこれは、外国人への「差別」になると思います。

日本人にはやはり外国人へのけいかい心や自分とは違うという特別な見方が強いと思います。だから、避けてしまうということもあると思います。でも、自分たちとみかけも文化も違う外国人を特別な目で見ないということも難しいと思います。特に外国人はこころへんでは目立つ存在なので気になってしまいます。でも、特別な存在であるとしても、避けたり、親切にしなかったり、仲間はずれにすることは間違ったことです。たとえ、言葉は通じなくても、生まれた土地は違ってもお互いに思いやりの心をもって親しい関係を築いていくことが必要だと思います。

私の弟は三才です。ある時、ブラジルの同じぐらいの女の子と知り会う機会がありました。その女の子は日本語はしゃべれません。だから、二人は言葉が通じ

ません。でも二人はすぐに仲良くなっていました。仲良くなるのに言葉は必要ではないのだなあと二人を見て思いました。大きくなると、自分の気持ちや考えを伝える手段として言葉を主に使います。ですから、言葉が通じないとすると、その人とは仲良くなれないと決めつけてしまいます。でも、小さい二人は一緒に走ってみたり笑ってみたりそれだけで仲良くなれています。私たちもそのことに見習い、難しいことは考えずに、ただ親切にしてあげたり、笑ってあげたりすることによって少しずつお互いに距離を縮めていけるのではないかと思えます。

生まれた国が違うから、分かり合うことなんてできない、そう考えるかもしれませんが、でもそれは、自分が分かり合おうとしていないだけかもしれません。生まれた国が違うだけです。一人の人間として誰も違う人などいません。ですから、国や国境も関係なく一人一人がお互いに尊重しあえるような社会をつくっていくべきだと思います。思いやりの気持ちを忘れないようにすべきです。皆が少しでもそのことを心にとめるなら、ポードールレスな社会も生まれてくるはずですよ。

世界の子どもたちに私たちができること

石川県立金沢桜丘高等学校 一年 能波 真穂

私たち日本の子どもたちの生活といえは毎日学校に行つて勉強や部活、友達と会話をして楽しみ、とても充実した日々を送っているだろう。勉強が嫌になつたりしてつらいこともあるが、自分の家に帰ると落ちつくことができるし、好きなこともできる。

このような生活は私たちにとってはごく普通のこと。しかし実際は、すべての子どもたちがこのような生活をしているわけではない。世界には私たちからすれば想像もつかないような生活をしている子供たちがたくさんいる。

例をあげれば、家にお金がなかったり、仕事のために学校に行けない子ども。戦争の被害に遭って食べ物も少なく、ちゃんとした家や落ち着ける場所がない子どもなど。まだまだたくさんいるだろう。

戦争をなくすということは、今の私たちには無理なことだろう。だけど、もっと他にできることがあるだろう。

例えば、よく見かける募金活動。これに参加するのもとても大切なこと。わずかなお金でも、世界の子どもたちにとってはすごく役立つ。他には、使わなくなった物を集めてその子どもたちに送ってあげる。これはあまり見ないが、保育園などでしている所もあるらしい。

この活動をよくしている団体にガールスカウトがある。私はこれに所属している。いろいろな活動をし、経験している。小学校の時はユニセフの募金活動に協力した。みんなで募金箱を持ち、街で募金を呼びかけた。援助を求める子どもたちへ募金活動をしているユニセフはほとんどの人が知っているだろう。そのかいあってか、たくさんの人たちがユニセフ募金に協力してくれた。

現在高校生になった私は、ガールスカウトの活動の一つとして「ピースバック」というものを作っている。これは、袋の中に鉛筆やノート、クレヨンなどを入れ

て世界の子どもたちに送り、少しでも楽しめるようにと作るものだ。今はその材料を買う資金を集めるため、募金活動やフリーマーケットの参加を計画している。そして、ピースバックを知らない小学生たちなどのために、これについて分かりやすく説明しようと図書館で本を借り、インターネットで調べて模造紙にまとめている真最中だ。

私は募金活動を知っている人はたくさんいると思うが、ピースバックをよく知っている人はそんなに多くはないと思う。募金で集まったお金でワクチンを買いたい、ただただ生きるのではなく、ギリシアの哲学者、ソクラテスが言ったように、「よく生きること」を実現して行って欲しいと思う。だから、ピースバックを一人でも多くの子どもに届け、少しでも楽しい生活を送って欲しい。そのためには一人でも多くの人たちがこのピースバックについて理解し、協力していく必要がある。

私がガールスカウトに入ったのは偶然だが、今では入ってとてもよかったと思っている。このおかげで私は、ユニセフや世界の子どもたちについて興味を持つようになった。私はここで学んだり、経験したりしたことを生かしてたくさんの人にピースバックのことや世界の現状を伝えていけたらと思う。

「世界の子どもたちに私たちができること」とは、私は一人一人が勇気・人へのやさしさを持つことだと思う。募金箱を持って人々に呼びかける、それに協力するということにも勇気はいると思うし、人へのやさしさがなければこのようなことをしようとは思わないだろう。世界中の人たちが皆、勇気と人へのやさしさを持ってばきつと子どもたち、そして世界が平和になる。たとえ時間がかかったとしても、少しずつ世界を変えていけたらとても平和で皆が楽しく過ごせるような世界になっていくだろう。

開発教育・国際理解教育 支援事業のご案内

子どもたちに広い世界の様子を伝えたい、日本の国際貢献について話したい、子どもたちに考える機会を与えたい……。JICA北陸は、そんなお父さん、お母さん、先生方の「伝えたい!」という気持ち、そして、子供たちの「知りたい!」という気持ちを支援します。

JICA北陸またはJICA国際協力推進員までお気軽にご相談下さい。

JICA 国際協力出前講座

国際理解や異文化交流を深めたい、国際協力について教えたい、でも…どうしたらいいの？と、思っている方はいませんか？そんな時のきっかけづくりとして、JICAは楽しく分かりやすく実体験に基づいた講座を行っています。

小・中・高校・大学などへ講師を派遣します

開発途上国の実情を知り、国際協力の必要性を理解していただくため、各地の学校や自治体、国際交流団体、NGO講座などを対象に、JICA職員や青年海外協力隊OB・OG、来日中の研修員や帰国専門家などを講師として派遣しています。

講師は自らの経験をもとに写真やビデオを見せたり地図を広げたりしながら、開発途上国で働くことの楽しさや日本とは異なった生活ぶりについてわかりやすく講義します。



総合的な学習の時間、社会、道徳など、様々な授業でご利用いただけます。随時受け付けておりますので、講師派遣をご希望の方はお早めにご相談ください。

←高校で青年海外協力隊経験を講話中

初回の講師料、交通費はJICA北陸が負担します。原則、2回目以降は依頼元負担ですが、状況に応じ対応いたしますのでご相談下さい。

中学校で民族衣装を紹介している様子→



■□ 問い合わせ先 □■

富山県：TEL. 076-444-2500

石川県：TEL. 076-262-5932

福井県：TEL. 0776-28-8800

のJICA国際協力推進員まで

教師海外研修

開発教育・国際理解教育に取り組んでいる小・中・高・盲・聾・養護学校の教員を対象に、開発途上国で約10日間（夏休み期間）の研修を行っています。

学校現場、保健医療施設、青年海外協力隊の活動等を視察いただき、開発教育・国際理解教育実践授業に役立てていただくプログラムです。（参加者負担：予防接種費、現地宿泊費、食費、資料購入費等）



訪問先ではたくさんの現地のの人々と触れ合いました

北陸3県からの参加状況（平成20年度は、タンザニアにて海外研修予定です。）

	研修国	福井県	石川県	富山県
平成17年度	エジプト	2名	5名	—
平成18年度	タンザニア	5名	2名	1名
平成19年度	タンザニア	—	5名	3名

帰国後、教師海外研修に参加された教員の方々は、研修で学んだことを積極的に取り入れた授業などを実践されています。

タンザニアの民族衣装を試着→



JICA北陸のホームページで実践授業の様子を紹介していますのでご覧ください。

<http://www.jica.go.jp/hokuriku/enterprise/kaihatsu/kaigaikenshu/index.html>

■□ 応募・問い合わせ先 □■

独立行政法人国際協力機構 北陸支部（JICA北陸）

TEL. 076-233-5931

JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト

次の世代を担う全国の中学生・高校生を対象に、開発途上国の現状と国際協力の必要性について理解を深め、国際社会の中で日本は何をすべきか、また、自分たちひとりひとりがどう行動すべきかについて考えてもらうことを目的として、国際協力に関するエッセイコンテストを実施しています。

自身の体験、本やテレビを通じて感じたことをつづってご応募下さい。上位入賞者には海外研修旅行の副賞があります。

<募集期間> 6月上旬～9月下旬
審査結果は翌年1月に発表します。

<応募規程> 作品は日本語で未発表のものに限ります。

- 中学生の部 400字詰原稿用紙 3枚以内
- 高校生の部 400字詰原稿用紙 4枚以内

<賞> 中学生・高校生各

- 最優秀賞 3名
 - 独立行政法人国際協力機構理事長賞 1名
 - 外務大臣奨励賞 1名
 - 文部科学大臣奨励賞 1名
- 優秀賞 4名
- 審査員特別賞 4名
- 国内機関長賞 11名
- 入 選
- (社)青年海外協力協会会長賞
- 学校賞
- 特別学校賞



↑表彰式（北陸地域）の様子

JICA 訪問他（国際協力をもっと知りたい方へ）

JICA 訪問

課外活動、修学旅行などでJICAを訪問してみませんか？

JICA北陸（金沢市）のほか、JICA地球ひろば（東京）、JICA大阪など、全国各地のJICAで施設訪問を受けています。

JICAの実施する国際協力事業説明、青年海外協力隊体験談など、希望する内容について事前にご相談ください。



JICA北陸を訪問された↑
中学生の皆さん

視聴覚教材貸出し

国際協力の現場や開発途上国の様子を伝えるビデオや写真パネルや、JICAフォトランゲージキット（世界7カ国の生活や文化を写した35枚の写真と指導案がセットになった開発教育用教材）を無料で貸し出しています。

学校の授業や行事、地域のイベントにぜひご活用ください。



JICAのホームページ

- JICA ホームページ
<http://www.jica.go.jp/>



- ぼくら地球調査隊
<http://www.jica.go.jp/kids/pages/index.html>



- <主催> 独立行政法人国際協力機構（JICA）
- <後援> 外務省、文部科学省、日本放送協会、全日本中学校長会、全国高等学校長協会、全国国際教育研究協議会、日本私立中学高等学校連合会、産経新聞社、読売新聞社、各都道府県教育委員会及び政令指定都市教育委員会、社団法人青年海外協力協会、財団法人日本国際協力センター
- <協賛> 全日本空輸株式会社、株式会社日本航空インターナショナル、タイ国際航空
- <協力> 株式会社国際サービス・エージェンシー

JICA 国際協力中学生高校生 エッセイコンテスト 2007 優秀作品集—北陸編—

2008年3月

発行者 独立行政法人国際協力機構 北陸支部（JICA 北陸）
〒920-0853 石川県金沢市本町1-5-2
リファーレ（オフィス棟）4F
TEL：076-233-5931／FAX：076-233-5959
E-mail：jicahric@jica.go.jp
URL：http://www.jica.go.jp/hokuriku
